

<随想>拈華微笑：西田先生と私

著者	齋藤 秀昭
雑誌名	日本文學誌要
巻	49
ページ	96-97
発行年	1994-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019731

拈華微笑——西田先生と私——

齋藤 秀昭

八九年四月に法大日文科へ入学した私は、大学三年になり、西田ゼミを履修した。私にとって、西田先生との出会いは、まさに“大”学との出会いでもあった。

法大日文科で最も厳しいと噂されていた西田ゼミを私が履修することにしたのは、それまでノッペラボーな大学生活を送って来た自分自身を見直し、その自分自身にしっかりとした目鼻を書き入れたかったからに他ならない。大学一年の後期から携わって来た日文科学生委員会の活動を通して、いくらか私は『私と文学』『私と大学』といった問題意識を持つに至ってはいたが、ゼミナール（大学の本質）の経験が無いということは私を心許無くさせていた。“一体自分は何をしに来たんだ。このままではいけない!!”と心底思った私は、厳しいゼミナールを敢えて選択した。

そして、西田先生との有機的な関係の第一歩は、九一年五月に富

士ゼミナール・ハウスで行われた西田ゼミ・オリエンテーション合宿において果たされた。存在感のある大きな体とクリクリとした大きな瞳を持つ西田先生に相対した私は、まるでヘビに睨まれたカエルも同然であった。そこでの西田先生の講義は、“観察——仮説——実験”という、人間が情報を知識としていく認識のサイクルを文学鑑賞の方法に応用したものであり、それは約八時間にも及んだ。透谷の文章を読んだ尚江という訳ではないが、それは腹に大砲でも打ち込まれたかのような衝撃を私に与えた。これまでの自分の人生が情報に操られたウソの人生であったのではないだろうか、という痛切な自己批判を余儀無くされると共に、文学に関しては、「良心で作品を読め!!」と力説されるのを聞くことで、文学鑑賞の基本中の基本を学んだ思いがした。西田先生との出会いで得た印象、それは、並はずれてスケールのでかい人物と会ったものだ”というのが、決して御世辞ではない正直なものであった。

ゼミナールに入ってから私は、文字通り“ゼミ生活者”（過去の西田ゼミ生が小林多喜二の『党生活者』を振って自分達に命名した言葉）となった。週一度の本ゼミの前には最低三〜五回のサブゼミ（一回につき二〜五時間）を行い、春・夏・秋・卒業と年四回も一部二部合同で合宿を行い、年に二回、電話帳とも呼ばれる『前期・後期報告集』をゼミ生全員の手作業で作るなどということとは、学生個々の自主性なくして出来ることではない。そこにはまさしく“学ぼうとする意志を持った人間の集まり”大学”があった。先日行われた西田ゼミOB座談会においても確認されたことだが、西田ゼミのこの三二年間を鑑みるに私は、西田先生が学生の自主性・主体性を重んじ、常に大学のあるべき姿を追求なされて来たことを実感し

ないわけにはいかない。自主自立の精神は最後を迎える三二年目の今も西田ゼミに脈々と流れている。「ゼミ生活者」としての私の生活は、大学院に進学した今も続いている。そして、それはなかなか止められそうにもない。

さて、西田先生と私との関係は、先生に「齋藤はダメな奴だ」と思われたい限り、これからも続くであろうし、西田ゼミも大学の建物とカリキュラムを離れて今年（九四年）の四月から再生していくことでもあるので、こうした回想は大変書きづらい。されど、折角いただいたこの場合は、西田先生と私との一つの区切りであり記念でもあるのだから、後で先生に何と言われようとも、ここは勇気を振り絞って頑張らねばならぬ。ウソや誇張は一つも無いのだから、胸を張ってペンを進めよう。しかし、このまま書き続けるといつ終わるとも知れないので、大分圧縮せざるを得まい。

文学を学ぶ人なら誰でも知っていることだが、文学を学ぶということはその一面において、自分の人生を省みて常に仮借なき批判を浴びせつつ、それでもなお、前に突き進んで行くことである。こうした文学と自分の生き方との密接した緊張関係を私は西田先生と接する中で多く学んで来た。西田先生が専門となさっている田岡嶺雲に「説を変ずるは良し、されど節は変ずるなかれ」という言葉がある。学説や主張は人の成長と共に変化するものだから変えても良いが、自分の信念や節操は変えてはならない、という意味だ。初めてこの言葉を西田先生からお聞きした時、嶺雲の言葉が先生の血肉となることで、それが先生御自身の言葉となっているのを強く感じた。日本社会文学会・非核自治体運動・平和運動など、西田先生が思想の実践として手掛けて来られた活動は数知れない。自分の思想を、

今日は白で明日は黒というようにコロコロと変える節操の無い遊びとしてではなく、「人間らしく生きる」本当の知識として実践に移していける西田先生の姿は、常に私の心を大きく揺さ振って来た。機会のあるたびに私達西田ゼミ生は西田先生の下、国際シンポジウム・研究大会などといったものに数多く携わって来たが、そのことを通して思想を実践に移す厳しさを学べたことは、人生の大きな収穫となったのである。今の大学ではこうした経験はまず出来まい。本当に私達は幸せ者である。

“拈華微笑”（ねんげみしょう）とは、昨年（九三年）十二月五日に西田ゼミ主催で行った西田先生の最終講義（四五〇人が集まった）において、先生が引用なされた仏教の言葉である。華（はな）を拈（つま）んで民衆に示した釈尊と同じように、西田先生は「人生は華のように美しく純粋であれ」とおっしゃって法大での教師生活にピリオドを打たれた。まさに西田先生らしい美しい去り方であった。これからの私は、西田先生と出会えたことの幸運と責任を強く噛み締め、文学の勉強をさらに真剣に推し進めると共に、西田先生から学んだ美しい人生の創造ということを目指して頑張っていきたいと思っている。それが西田先生に対して私が出来る唯一の御恩返しだ。

最後に西田先生がよく口になされる言葉を一つ記しておこう。これの意味するところを会得できるのはいつの日のことだろうか。

“己れを守る者は己れを失い、己れを捨てる者は己れを拾う”

（さいとう ひであき・大学院修士課程一年）